

2021/7/8

(うと Q 世話し「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」1/4)

命題：なぜわが国だけがいつまでたってもデフレから抜け出せないのか？

：換言すれば値上げも賃上げも起こらないのか？良いインフレにならないのか？

その原因を本日は自分なりに探してみたいと思います。今日も叩かれる覚悟で。

「生産者は同時に消費者でもあり、商品・サービスの妥当な値上げが賃上げに連動すれば消費が盛んになり、結果消費者のもう半分の側面である生産者をも潤し、経済の好循環に両側面から寄与する」

これを一言で簡単に言うと

「お金は使わなければ入ってこない」

です。

雇い主である生産者は従業員に給料として、消費者でもある従業員は市場に商品購入代金としてお金を使わないと、消費者のもう片方の側面である生産者側にはお金は入ってこないという悪いスパイラルが産まれてしまう訳です。

諸外国では上述の傾向が顕著であるデフレを回避する為には「お金は使わなければ入って来ない」という考え方は働く側からの理解も得られるのに何故わが国ではそれが許されないのか？

自分はこの「いかなる理由があっても値上げを許さない」風潮が、海外からの安い製品輸入による価格引き下げ圧力以上に大きな要因だと考えております。S

これをご説明申し上げるのに「江戸時代へ時を巻き戻すタイムスリップ」をしてみると分かり易そうなので是から試みてみようと思います。

まず「値上げ」と耳にすると我々が直ぐさま抱く感情は「善良な庶民(=消費者)に対する弱い者いじめ」ではないでしょうか。

そうして、生産者はお上と結託して暴利を貪る悪徳商人「越後屋」

TVドラマのあの有名なセリフ

「越後屋、お前も悪(ワル)よのう」

「いえいえ、お代官様程では」

そして二人「ガハハッ」の大爆笑、のあれです。

この時代劇を見て子供の頃は

「また今回もやってらあ」

と呆れながらも笑っておりましたが、実はこのセリフが案外我々の脳裏深くに染みついて作用しているのではないだろうか？と思い始めました。

同じ時代、アメリカのTVドラマ「パパは何でも知っている」の中に出てくる物わかりがよくてスマートで優しい父親像、フェミニストでインテリ。且つ家の中でも上品にカジュアル・ブレザーを着こなし、決してステテコ姿にならないその姿が、その後の時代の「母親から見ても、そして父親自身も」父親の理想像は斯く在るべしと重々納得の上、決定づけたの

と同じ程の作用があったのではないかと考えております。

(続く)